『小秋遺稿』を読む
―夭折した閨秀詩人・南廉の和歌と漢詩

柴田清継

はじめに

本稿は、『小秋遺稿』という明治四十三年（以下、「明治」は省略）に発行された私家版の本について紹介するために草する。

『小秋遺稿』は、四十二年に二十三歳で夭折（ようせつ）した南廉（女性）、号小秋の詩歌（和歌と漢詩）集で、全部で二十丁ほどの和装本である[1]。公共図書館でこれを収蔵しているのは新潟県立図書館だけのようである。筆者は日本の和文学については門外漢なので、以下、主として漢詩文の方に重点を置いて述べるが、この詩歌集は文字通りの小冊子とはいえ、小秋の作品のレベルもさることながら、彼女の伯父阪口五峰の興味深い内容の序文（「引」と称されている）が登載され、題詞にも彼の知友の作品が配されている。その意味で、やや買い被りの嫌いがあるかもしれないが、新潟の明治期の漢詩文のレベルや、その背景となる歴史の一端を知る一助ともなるのではないかと、筆者には思われる。

ここで、『小秋遺稿』の構成と各部分の大体の丁数を示しておこう。

小秋遺稿序（歌川秋南譔）　一丁
おち椿　※これが上述の和歌の部
おち椿題詞　三丁強　※七名の歌人の作品
おち椿　四丁弱
玉梅小稿　※これが上述の漢詩の部
玉梅小稿引（阪口五峰識）　一丁
玉梅小稿題詞　一丁　※五名の詩人の作品
玉梅小稿　二丁半
小秋遺稿後叙（南秋山誌）　一丁強
奥付

以上のような配列とは取り上げる順序が前後することになるが、『小秋遺稿』の内容を少しでも要領よく紹介するために、本稿では次のような順序で記述していくことにしたい。

一、父南秋山の「後叙」に述べられた小秋の闘病と死
二、小秋が残した和歌と漢詩
　(1)和歌　(2)漢詩
三、題詞とその作者
　(1)和歌の部　(2)漢詩の部
四、歌川秋南の「小秋遺稿序」と阪口五峰の「玉梅小稿引」
　(1)歌川秋南の「小秋遺稿序」　(2)阪口五峰の「玉梅小稿引」

一、父南秋山の「後叙」に述べられた小秋の闘病と死

まずは小秋が短いながらも、どのような一生を送った人であるかを、

[1] 奥付には次のように記されている。「明治四十三年十月十五日印刷明治四十三年十月十八日発行編輯兼発行者東京市牛込区榎町七番地渡辺八太郎印刷者東京市牛込区榎町七番地渡辺八太郎印刷所東京市牛込区榎町七番地日清印刷株式会社（小秋遺稿奥付非売品）」

父南秋山の「後叙」により把握しておきたい。

小秋の父親―南義二郎（一八六四～？）は阪口五峰の実弟であるが、北蒲原郡南浜村（現在は新潟市北区）の南家に婿入りした。その南義二郎、号秋山が娘の一周忌の四十三年八月十五日に「涙を攬りて（手にこぼれるほど涙を流して）誌」した「小秋遺稿後叙」により、小秋の短い一生、特に病を得て以後のことが知られる。以下、漢文で記されているその文章を、分かりやすい表現に直してみよう。

南義二郎の長女で、二十年十一月二十七日に生まれた。名は廉、小秋はその別号。十四歳で、新潟高等女学校に入った。卒業後は家に二年余りいて、その間、「針線の暇」には父が詩歌の手ほどきをした。生まれつき賢く聡い子で、まま佳作ができた。そんな折、病（おそらく結核）にかかり、なかなか治らぬため、父は東京まで連れて行って診察を受け、さらに熱海、茅ケ崎の海浜へ移って療養に努めさせた。その後また東京に戻り、あらゆる手立てを尽くしたものの、効果がなかった。彼女は病気にかかった時から、不治の病であることを悟り、思いを詩歌に託して悠々自適し、憂いの色は全く見せなかった。

四十二年の四月、急を知らせる電報が届き、父は東京へ駆けつけた。彼女は父に、どうしても故郷に帰りたい旨告げた。たまたま容体が少し持ち直した際に、父に介抱されて帰郷し、新潟病院に転院した。医者から死期が間近に迫っている旨告げられたが、彼女の言動は平素と異なるところがなく、誰もが驚嘆した。彼女が息を引き取る前日、家にいた父は、烏の悲しげな鳴き声を耳にして、動悸が激しくなり、胸騒ぎを覚えて、その夜のうちに新潟に駆け付けた。すでに危篤に陥っていたものの、父が来てくれたことを喜び、そして従容として永い眠りに就いた。八月十五日のことだった。享年二十三。

父は彼女の早逝を悼み、遺草を検して、その「刪潤」（添削し潤色する）を山田穀城と伊藤香草の二氏（いずれも後で言及する）に委嘱した。その編集作業が終わり、漢詩の部は「玉梅」、和歌の部は「落椿」と、それぞれ名づけられた。いずれもこの二氏の題詞中の言葉を使っての命名である。

ここで筆者（柴田）の補足説明を挟んでおきたい。―「おち椿題詞」の筆頭に位置する穀城の歌は五首あり、その第四首が「亡き人のうた誦して倚る夕窓に寂しく落つるしらたまつはき」というものである。一方、「玉梅小稿題詞」の筆頭に位置する香草の七絶の結句が「招魂又返玉梅春」となっている（いずれも傍線―筆者）。以上。

義二郎の後叙に戻る。四十三年の一周忌の日に、活字版として成ったこの作品集を知人・友人・親戚に頒布した。

二、小秋が残した和歌と漢詩

(1)和歌

和歌の部―「おち椿」は、歌題八つ。各題の下に一首から四首詠まれており、計十五首である。それほどの字数ではないので、全部掲載しよう。歌題の部分は別として、歌の部分は上の句と下の句、原本の通りに改行して転記することにし、便宜上、各題・各首の末尾に通し番号を添えることにする。

父に伴はれて医師を東京に求めんとて越後より信濃にかゝりし時（歌題一）

人の身に思ひ比へてゆゝしきは
くろかみ山のいたゝきのゆき（①）

くろかねの道行く車うちとゝめ
　問ふ由もかなたゝかひのあと（②）
信濃路や秋にしあらは一夜たに
　つきにやとらんさらしなの里（③）

軽井沢にて（歌題二）
朝間やま夕ゐるくもの空さむみ
　こほりて雪となりにけらしも（④）

磯部蕨大宮等の駅路をすきて（歌題三）
武蔵野の尾花の浪のゆかりより
　このやまさとを磯辺てふらん（⑤）
うら枯るゝ薄のすゑに月見えて
　むかしなからのむさし野の原（⑥）
萌え出て摘まるゝ春にあらね共
　うらなつかしきさわらひの里（⑦）
国造かいつきし蹟のしのはれて
　今もかしこしおほみやところ（⑧）

東京に着きけるに空寒くして垂れこめてのみありけれは雪といふ題をさくりて父は　世の中に漲る塵を白雪の百重の下に埋めてしかなとよみ給へり病ある身には外に思ふ事もなく壁に掲けたる画を見て（歌題四）
老ひとにゆつる礼こそ今もなほ
　ひなにはのこれ雪のほそみち（⑨）
見るかきり雪に埋れてとなり村
　なかなかちかくなれる道かな（⑩）

なとよみけるに父は松の山の妹はいかに暮らすらんなと打語らはるわらは代りて消息の端に（歌題五）
みやこ路は吹く風寒し越の奥の
　松のやま辺はみゆき降るらし（⑪）

熱海の一碧楼といふに冬籠しける時（歌題六）
咲き出てん花の匂ひも鳥の音も
　しはしこもりて春を待つかな（⑫）
何事を為すともなしに明日香風
　あすとのみ云ひて過しつる哉（⑬）

此地春の来ること早く一月の始に梅園の花盛りなりときゝしか浦風の肌に沁めはとて得ゆかさりき（歌題七）
誰か園の梅の花にか触れつらん
　今朝吹く風の香ににほふなり（⑭）

病める身は春の光にも打背きてのみ居ぬ父は徒然に堪へすとて　千万に身を分ちても山々の花を隈なく尋ねてし哉とよみ給へるにわらはも（歌題八）
人も来す風もおとせぬ里あらは
　こゝろのまゝに花を見てまし（⑮）

以上十五首、父に伴われ、東京の医者の診察を受けるべく鉄道で赴き、その後、熱海の温泉宿―一碧楼[2]で療養していた頃までのことが詠まれている。ちょっと珍しいのではないかと思われるのは、全首にわたり上の句も下の句も字数がそろえられていることである。このこだわりは作者の意図、あるいは何らかの方針によるものなのだろうか。

実は、⑪の歌の次には「松の山の妹」からの返歌も配されているのだが、それも、

うつみ火の外に便りの無き頃は
　みやこのつてを聞くそ嬉しき

というもので、やはり字数がそろえてある。そして、後述の「おち椿題詞」に掲載されている七名の歌人の作も、すべて小秋や「松の山の妹」の作と同じ字数にそろえてある。「刪潤」を委嘱され、自らも題詞の詠み手の一人である山田穀城が、小秋の作に合わせてそのように詠み、かつ他の題詞の詠み手にもそのように指示したか、あるいは山田穀城が小秋のものも含む全作品の調整を図ったかのいずれかであろうと推察するしかないだろう。なお、「松の山の妹」と山田穀城については、後で再度言及する。

小秋の歌の詠風について言えば、黒髪山に雪を詠み合わせたり[3]、信濃路に更科の月を持ってきたり[4]と、歌学の教養を踏まえた堅実なものと言っていいのではないかと思われる。

些細なことにこだわるようだが、やや解せないのは、⑤の歌の磯辺（磯部）は現在の群馬県安中市に当たるから、武蔵野と関連付けるのはちょっと無理があるのではないか、⑧の歌の「国造」が武蔵の国のそれであるなら、東京の中心部より西の方の現在の府中市の辺りであるから、群馬県から南下してきて東京に着く前にその辺りを通るというのは不自然ではないか、といったことである。ただ、これらの点は文芸的な価値との関連性は薄いかもしれない。

なお、和歌の部―「おち椿」の末尾には当時歌人として名声を博していた井上通泰（一八六七～一九四一）による「明治四十三年六月十一日　井上通泰　払涙一閲」との識語が印されている。

⑵漢詩

「玉梅小稿」と題された漢詩の部は、熱海の一碧楼、次に茅ヶ崎の南湖院（後述する）で療養中の作と「臨終作」、都合七言絶句十首である。順番に見ていくことにしよう。

一碧楼即事

柳靄籠庭懶放晴（ママ）　柳靄（りゅうあい）庭を籠（こ）め　晴（め）を放つに懶（ものう）し
深窓繡倦対茶鐺　深窓　繡（しゅう）倦（う）み　茶鐺（さそう）に対す
隔簾仄聴小池面　簾（すだれ）を隔て　仄（そばだ）てて聴く　小池面

2　一碧楼は江戸時代から続く熱海の有名な温泉宿。有限会社平凡社地方資料センター編『静岡県の地名』（平凡社　日本歴史地名大系第二二巻、二〇〇〇年）二二四頁。

3　例えば源頼政の歌に「身の上にかからむことぞ遠からぬ黒髪山に降れる白雪」というのがある。

4　例えば『古今和歌集』の読み人知らずの作に「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照月を見て」というのがある。

魚唼落花微有声　　魚　落花を唼み　微かに声有り

起句の「晴」の字は「睛」の誤りではないかと思われる。部屋の前には柳の木、その柳の木に春の靄がまつわりついていて、どうせ外はよく見えない。だけど、刺繍にも倦んできたから、お茶を入れ、外の気配に耳を澄ましてみると、池の魚が落花をついばんでいるらしいかすかな音が聞こえてきた。

春雨

真情欲訴又含羞　　真情　訴えんと欲するも　又　羞らいを含む
脈々凄寒懶倚楼　　脈々たる凄寒　懶くして楼に倚る
蛺蝶抱花粉衣重　　蛺蝶　花を抱き　粉衣　重し
一簾微雨湿春愁　　一簾の微雨　春愁を湿す

相手は誰か分からないが、どう見ても恋情を詠んだ作である。ただ、そんな恋情に浸っている時も、ぶるぶるっと震えるような寒さに見舞われ、元気は出ない。そんな私は、あなたへの思いで身動きが取れなくなったチョウチョのようなもの。窓の向こうで降っている小糠雨のため、私の春の愁いは、ますます晴れない。

作者の教養範囲内にあったとは想定しにくいが、孫光憲（九〇〇～九六八）の詞―「浣溪沙」に結句とよく似た表現があるので、挙げておきたい。

浣溪沙　　孫光憲

攬鏡無言淚欲流　　鏡を攬りて　無言　涙　流れんと欲す
凝情半日懶梳頭　　情を凝らすこと　半日　頭を梳るに懶し
一庭踈雨湿春愁　　一庭の踈雨〔まばらに降る雨〕　春愁を湿す

（以下略）

小秋の作品に戻ろう。

鏡中

鏡中奈此瘦容何　　鏡中　此の瘦容を奈何せん
三月懨懨只病魔　　三月　懨懨〔病み疲れる様〕たり　只だ病魔
小倚紅欄干一角　　小く紅き欄干の一角に倚れば
牡丹花老暮寒多　　牡丹の花は老い　暮寒　多し

この作品は、説明の必要がないだろう。

作家書

湘南養病一年餘　　湘南　病を養いて　一年餘
少快今朝髪始梳　　少しく快く　今朝　髪　始めて梳る
欲緩爺孃思女意　　爺孃〔父母〕の女を思う意を緩げんと欲し
急将彤管作家書　　急ぎ彤管〔赤い軸の筆〕を将て家書を作る

これも説明の必要はあるまい。

新秋夜坐

客裡金風動井梧　　客裡　金風　井梧を動かし
無端想到故園廬　　端無くも　想い到る　故園の廬

一窓燈火分涼影　一窓の燈火　涼影を分かち
阿母裁衣妹読書　阿母は衣を裁ち　妹は書を読む

「金風」は秋風。「井梧」―井戸のほとりの桐木立は「秋の気を象徴するものとして詩詞に頻繁にみえ」、「俗説に梧桐は立秋の日に初めて一葉を落とすといい、大きな葉を一枚一枚散らせてゆくあおぎりは、凋落の秋を象徴する木」である[5]。作者も、井戸端の梧桐に吹き寄せる秋風に、望郷の思いを募らせたのである。窓越しに見える燈火が、裁縫をしている母と、本を読んでいる妹を照らし出している。

南湖間行　南湖在茅崎村外

扶病間行水石隈　病を扶えて〔病体をおして〕間行す　水石の隈
南湖秋碧鏡光開　南湖　秋碧　鏡光　開く
阿儂近日梳粧懶　阿儂〔私〕は近日　梳粧〔おめかしする〕　懶し
譲与芙蓉照影来　芙蓉の影を照らし来るに譲与らん

遅くともこの六首目あたりからは茅ケ崎に移って以後の作である。南湖は、湖の名前ではなく、湘南海岸に面した海浜地域としてイメージする必要がある。そして、重要なのは、当時そこには南湖院という結核療養所があったことである。創立者は高田畊安（一八六一～一九四五）で、三十二年に第一病舎が建築され、その後、二、三年ごとに次々と病舎が設けられたという[6]。この一首は、その南湖院で療養するようになってからの秋晴れの日、比較的体調も良かったのか、風光明媚なその一帯を散策した時の作品だろう。このところおめかしもしなくなった私は、秋の日差しの下で輝いている芙蓉に、美しさのトップの座を譲りましょうと歌う後半二句は、字句の使い方もさることながら、一抹のペーソスを滲ませつつも、悲嘆一方に陥らず、己を見失っていない落ち着きを感じさせる。出色の表現と言えるのではないだろうか。

秋窓即事

湿透胭脂露未乾　胭脂を湿し透して　露　未だ乾かず
秋階暁見海棠寒　秋階　暁に見る　海棠の寒きを
背人窓下偸花様　人に背きて　窓下　花様を偸み
移入金鍼欲繡難　金鍼に移し入れんも　繡せんと欲して難し

ある秋の日の明け方、窓から見下ろす階の片隅に、露に濡れてまだ乾いていない、頬紅のようなピンクの海棠の花を見つけた。私は人知れず、窓越しにその花の様子を見て取って、刺繍の糸で縫い取ってみようとしたけれども、ちょっと難しかった。二十歳そこそこでしだいに衰弱しつつある自分が、本来ならその真っただ中にあったはずの、初々しい可憐な美しさから遠ざかりつつあるという思いが、言下に込められているであろう。

5　村上哲見注『李煜』（岩波書店　中国詩人選集第十六巻、一九五九年）二十八、四十六頁。

6　茅ヶ崎市文化資料館南湖郷土誌編集委員会編『南湖郷土誌』（茅ヶ崎市教育委員会、一九九五年）一〇五頁。

春夢

鴨鑪一晌篆煙空　　鴨鑪　一晌　篆煙　空し
蕭索病懐深院中　　蕭索たる病懐　深院の中
生怯峭寒吹入袖　　生まれながら怯ゆ　峭寒の袖に吹き入るに
梨花春雪半簾風　　梨花　春雪　半簾の風

せっかく焚いた香も間もなく消えてしまった。ますます寂しい思いを抱いたまま、療養所の奥深く閉じ込められている私。袖に吹き込んでくる、ひんやりとした風は昔から苦手。結句は言葉を配列された順に受け止めて杓子定規な解釈をするのではなく、一種のデフォルメと見なし、春の雪の中で咲く梨の花のような私、そんな私が窓の透き間から吹き込む風でますます弱々しくなっているというイメージを伝えようとしていると解するのがいいように思われる。

春晩

杜宇啼辺嫩緑遮　　杜宇〔ホトトギス〕　啼く辺り　嫩緑　遮る
今年又是不帰家　　今年も又是れ　家に帰らず
沈々庭院鎖終日　　沈々たる庭院　鎖さるること終日
厭見僝風吹落花　　見るに厭きたり　僝風　落花を吹くを

前半二句は、ホトトギスの鳴き声が「不如帰去」という人間の言葉に酷似する音として聞こえたという故事（『華陽国志』等）を踏まえている。つまり、新緑の向こうからホトトギスの声が聞こえてきて、故郷に帰った方がいいよと呼びかけてくれているようなのだが、私は今年も家には帰れない、という意味になる。結句の「僝風」が、この作品集の小秋の漢詩の中で最も解釈に苦労する言葉であるが、一応次のように解釈しておく。『漢語大詞典』では、「僝」の字の意味として「折磨」（苦しめる、痛めつける、いじめるといった意味）というのがある[7]。これなら、ここに当てはまる。後半二句全体として、ひっそりとした療養所の中に閉じ込められたまま、意地悪な風に吹かれて花びらが散っていくのが窓越しに見える、そんな毎日にはもううんざりしたというような意味になるだろう。言うまでもなく、「落花」は作者自身の暗喩でもあるだろう。

臨終作　去年九月母妹没今茲四月父弟逝

凋零骨肉已堪憐　　凋零せる骨肉　已に憐れむに堪えたるも
儂亦沈綿病幾年　　儂も亦　沈綿　病むこと幾年ならん
蟬脱人間従此去　　人間〔この世〕を蟬脱して　此より去り
奉将二叔侍重泉　　二叔を奉将りて重泉に侍せん

原注にある母の妹については未詳だが、「今茲（四十二年）四月」に逝った父の弟とは、帆苅隆氏の「坂口家姻族の系図―坂口安吾関連資料」所載「松之山村山家の系図」に「坂口得七三男」、三十三年十月末に松之山村山家の婿養子に入ったとして見える信吾（一八七七～一九〇九）のことである[8]。信吾は享年三十三だったが、母の妹もまだ四十にも

7 『漢語大詞典』第一巻八十六～八十七頁。
8 帆苅隆「坂口家姻族の系図―坂口安吾関連資料」（『国文学解釈と鑑賞』平成十八年十一月号）一五九頁所載「④松之山村山家の系図」。なお、信吾に関するより基本的な資料としては、五峰の「題亡弟大安絶筆後」の一文（『五峯遺稿』巻下二）があり、それによると、信吾は通称で、正式な名は大安である。

達していなかった可能性がある。前半二句は、この二人の骨肉の親の早逝を悼んだうえで、それらに加えての自分の長い病床生活を憐れむのである。後半は今のつらい日々から抜け出して、黄泉の国で叔父、信吾の世話をしてあげたいと結んでいる。

以上、全十首の後に、当時の我が国漢詩文界のリーダーの一人だった森大来（号槐南。一八六三～一九一一）の次のような識語が置かれている。

心花意蕊、質玉流珠。夙根慧業、僅値優曇一現、欝々埋香。曷勝惋痛。其詩哀婉凄惻、如啼蛄之弔月。不寿之徴、蓋具見于此矣。悲夫。

〔心は花のごとく意も蕊のごとく、質は玉のごとく流れも珠のごとし。夙根慧業、僅かに優曇の一たび現るるに値うや、欝々として香を埋む。曷ぞ惋痛するに勝えん。其の詩は哀婉凄惻にして、啼蛄の月を弔うが如し。不寿の徴、蓋し具に此に見れたり。悲しいかな。〕[9]

小秋の作は、美しい心根が美しい言葉となって流れ出ていること、前世からの素晴らしい素質が素晴らしい作品を生み出したが、それがほんのわずかな間だけで終わってしまったことが痛ましくてならないといったことを、得意の美文によって表現している。

識語の日付は庚戌、すなわち四十三年の中元となっている。周知のとおり、槐南は伊藤博文の秘書官を務めた人で、四十二年の十月、伊藤のハルビン行にも同行して被弾した。その時は軽傷だったが、約一年半後の四十四年三月、インフルエンザから肺炎・心臓病を併発して、四十九歳で逝去した[10]。被弾から死去までの日々のちょうど中間辺りの時期における執筆だったことになる。

三、題詞とその作者

(1)和歌の部

前述の通り、題詞も上の句と下の句の分かち書きにして、それぞれの字数をそろえてあるのだが、ここでは紙幅節約のため、作者の名の後、その作歌のすべてを改行なしで転写し、作者について何らか分かっていることがある場合は、それを記すことにする。

山田穀城：うるはしき物みなもろし白露のひかると見しは夢の間にして／まほろしに清き姿の来てたつとおほえては繰る君かうたまき／病める身にいく度か柔手休めつゝ書きたるあとかあはれその歌／亡き人のうた誦して倚る夕窓に寂しく落つるしらたまつはき／親しみし琴ももの憂く散る花にしのひ泣きけむ君はいつらそ

片桐道宇：言の葉のたまをつらねてあや錦織りけるひとのしのはるゝ哉／里人もかたりつくらん敷しまの道をたとりていにしその名を

畑野良平：玉椿はなは落つれと千代かけて言の葉のみそ朽ちせさりける

石井とむ子：在りし世に贈られたる南氏廉子の写絵を見て（題）思ひきやゑみて賜ひし写し絵に花を手向くる身とならんとは／五月雨の

---

9 「心花意蕊」は屈大均（一六三〇～一六九六）の詞「十二時　送蒲衣子入山」に見える言葉。「啼蛄弔月」は李賀（七九一～八一七）の「宮娃歌」に見える言葉。

10 槐南の逝去については、彼が首盟の地位にあった随鷗吟社の機関誌『随鷗集』七十七編（四十四年四月五日）「風雅餘誌」の「首盟槐南博士捐館」と題する記事等に詳しい。

ころ思ひ出てゝ（題）ほしあへぬ袖の涙にあはれなほ降り添ふものはさみたれの雨

村山さた子：兄なる人世を早うせし娘の咏草とておくられければ（題）緑子をとくいたかんと思ひしになとかいそきて此世いにけむ／今はたゝこの歌巻をくりかへしむかしを忍ふよすかとやせん

村山たまを：夫の身まかりし同し年秋山義兄のまな娘小秋も木の葉に先たちて散りうせぬ其遺稿なりとて示されけるに亡夫の事も見え一入涙とゝめかたくて（題）のこるこそ今は仇なれ亡き人の筆のすさひになみたつきせぬ

南三次郎：宗家の娘小秋の身まかりし明る年よみて主人に贈れる（題）散るのみを花に較へて咲き返るはるにならはぬ人そかなしき／落椿の　人の身に思ひくらへてゆゆしきは黒髪山のいたゝきの雪とあるを読みて（題）うつゝ身に比へ歌ひし人はまつ雪にさきたつくろかみのやま

山田穀城（一八七六～一九三三）は、佐渡相川生まれの歌人にして、『新潟新聞』記者。二十五年、佐渡青年文学会を組織、小金花作（こがねはなさく）の名で佐渡における和歌革新運動の旗手となり、二十九年、その文才を新潟新聞社社長の五峰に見込まれ、弱冠二十歳で同社に入社。また、秘書のような役目で坂口家に起居、五年後には論説も書くようになったという。[11]

片桐道宇（一八六五～一九四四）は新津（現在は新潟市秋葉区）の藩医の家に生まれ、上京して医学校に通ったものの、帰郷後は、三十九年に創設された村松教育会の副会長に就任、旧村松藩の歴史を記述した雑誌『松城史談』の発行に従事していた人である。[12]

畑野良平については、吉岡金峰の『越佐趣味の人々』[13]「文学の部」に「新潟市田中町、号『南山』元訓導、荒井賢太郎氏[14]と新潟師範同期の出身で秀才」とある。

村山たまをは、前述の小秋が⑪の歌を詠み送った「松の山の妹」で、上述の帆苅隆氏作成の「松之山村山家の系図」には、村山吉次の三女「珠雄」として載っている。夫は阪口五峰、南秋山の弟、信吾である。

村山さた子はたまをの妹と考えられる。

他の人物については不明である。

(2)漢詩の部

香草　伊藤復

忍看錦瑟長於人　看（みる）るに忍びんや　錦瑟（きんしつ）　人よりも長きを
粧鏡塵封一愴神　粧鏡　塵に封ぜられ　一に神（こころ）を愴（いた）む
零落臙脂留小草　臙脂　零落すれども　小草　留（のこ）りぬ
招魂又返玉梅春　魂を招き　又返さん　玉梅の春

11 『坂口安吾全集』別巻（筑摩書房、二〇一二年）所載「関連人物名鑑」八一五頁。

12 田村大作「寡黙、孤高の人～片桐道宇の思い出～」（「ふるさとの誇り100話」編集事務局編『ふるさとの誇り100話』、新潟県新津地域振興調整会議、二〇〇五年）二十三頁。

13 吉岡金峰『越佐趣味の人々』、大新潟時報社、一九三八年。

14 荒井賢太郎（一八六三～一九三八）は、新潟師範を卒業して、一時小学校に勤めた後、帝国大学法科大学に進学、卒後、大蔵省主計局長から枢密院副議長に至るまで種々の官職を歴任した官僚・政治家。

起句の「錦瑟長於人」は李商隠（八一三～八五八）が身罷った妻を悼んで詠んだ「房中曲」の一句をそのまま襲ったもので、次のようなそのコンテクストを踏まえる必要がある。李商隠が旅を終えて二年ぶりに我が家に帰ってみると、「帰来已不見、錦瑟長於人」―すなわち、君の姿は見えず、錦模様の大琴が君の背丈ほどの長さでそこにあるばかりだった[15]。作者にとって、もちろん小秋は妻ではないが、女性の死という共通点からこのような表現をしたのだろう。全編、女性を詠むのにふさわしい言葉を散りばめている。

伊藤香草（一八六五～一九二二）については、五峰の「伊藤香草伝」がある[16]。それによると、柄目木（現新潟市秋葉区）の人で、五峰を「一字師」（詩文などで、今一つと思われる表現をほんの一字でも直してくれた恩人）として「終身弟子の礼を執」ったという。兄の歌川秋南と二人で五峰の『北越詩話』の添削校正に協力した[17]。

第二作の詠み手大野天痴（一八六五～一九一六）と、第三作の詠み手大野菘坡（一八六八～一九二七）は兄弟である。

天痴　大野孝

落花流水逝無痕　落花流水　逝きて痕無けれども

妙筆欽君夙慧存　妙筆　君が夙慧〔生来の聡明さ〕存するを欽う

莫使阿爺撿遺草　阿爺〔父親〕をして遺草を撿せしむる莫かれ

怕他一読一銷魂　他の一たび読むごとに一たび銷魂〔魂が抜けたようになる〕せんことを怕る

菘坡　大野南八

玉梅咏与落椿歌　玉梅咏と落椿歌と

哀婉憐他麗則多　哀婉なるも　他の麗則〔麗しく典雅〕多きを憐れむ

蘭質蕙心忽消歇　蘭質蕙心〔美しい心と体〕忽ち消歇す

有才無命奈天何　才有るに　命無し　天を奈何せん

兄弟は北蒲原郡聖籠村（現聖籠町）諏訪山の大野楳華（一八三四～一八八四）の長男と次男。菘坡は伊藤香草や南秋山らと唱和する間柄だった[18]。

稼軒　小菅一

誰向東風惜歳華　誰か東風に歳華を惜しまん

生真薄命始為花　生は真に薄命にして始めて花と為る

小窓独把遺篇読　小窓　独り遺篇を把って読めば

春影如煙上碧紗　春影　煙の如く　碧紗に上る

前半二句、特に承句は袁枚（一七一六～一七九七）の七律の連作「落

15 高橋和巳注『李商隠』（岩波書店　中国詩人選集第十五巻、一九五八年）三十二～三十四頁を参照されたい。

16 香草自身の『香艸詩鈔』乾（伊藤千春、一九二二年六月五日）に、叔兄の歌川秋南の序の次に掲載されている。『大正詩文』第十二帙第四集（一九二二年四月十日）所載のものがより早いが、未見。なお、『五峯遺稿』巻下二（一九二五年）にも収載されている。

17 旗野博「歌川秋南と『秋南文存』」（本誌第二十号、二〇一七年）一三七頁。

18 『北越詩話』巻九、五六五～五七〇頁。

花十五首」の第一首を踏まえていること、明らかである。その一首の前半四句を挙げておこう。

江南有客惜年華　江南に客有り　年華を惜しむ
三月憑闌日易斜　三月　闌に憑れば　日　斜き易し
春在東風原是夢　春は東風に在っては原是れ夢
生非薄命不為花　生は薄命に非ざれば花と為らず

邱燮友氏（元国立台湾師範大学国文系教授）が、袁枚の「落花十五首」は第一首が全体の序に当たるとして、次のような解釈を提示しておられる（原文はもちろん中国語）。

最初の四句で袁枚は「落花」詩の時と所を提示し、暮春の落花を見て感慨を催したことを述べている。十五首の「落花」詩の主題は、「春在東風原是夢、生非薄命不為花」の二句にあり、この二句の意味は次のようなことである。すなわち、〈東風に吹かれて、花は咲いたり散ったりするが、それは本来一場の春の夢に過ぎない。古来、「紅顔は多く薄命」というように、生まれながら「花」たる存在は、この運命を免れ難い。〉（以下略）[19]

このような薄命だからこそ花なのだという美意識、やや大げさな言い方をすれば、そのような人生観をもって、小菅稼軒は小秋の一生を捉えてみたのである。そのような観点から彼女の遺篇を読んでいると、その春の盛りのような姿が彷彿としてくるというわけである。

本詩を筆者はかなりの出来栄えの作品だと思うが、残念ながら、作者小菅については未詳である[20]。

淡斎　南七蔵

不識芳魂那処尋　識らず　芳魂　那処にか尋ねん
一弾瑤瑟去来今　一たび瑤瑟を弾く　去来今
無端衣袖暮寒冷　端無くも　衣袖　暮寒　冷ややかなり
想見当年倚竹心　想見す当年　竹に倚る心

承句は明らかに、蘇軾（一〇三九～一一一二）の七律「過永楽文長老已卒」詩の頷聯「三過門間老病死、一弾指頃去来今」〔三たび門を過ぐる間に老・病・死、一弾指の頃去・来・今〕を踏まえている。蘇軾は杭州在任中に、三たび永楽郷の報本禅院に同郷の僧文長老を訪ねたが、三度目には

19　邱燮友「袁枚〈落花〉詩探微」（彰師大国文系編『第六届中国詩学会議論文集』、二〇〇二年）七十三頁。なお、直訳では分かりにくい点があるので、多少意訳した。

20　五峰と公私にわたり深い関係のあった市島謙吉（一八六〇～一九四四）の大正六年四月一日の日記に「小菅、小林堅三来訪」と見える（春城日記研究会「翻刻『春城日誌』（二六）『双魚堂日誌』―大正六年一月～七月―」、『早稲田大学図書館紀要』五十六、二〇〇九年）。小林堅三は早稲田大学図書館主事。本稿冒頭の注1に見えるように、『小秋遺稿』の印刷所は日清印刷であるが、これは早大総長の高田早苗が早稲田大学出版部用の印刷工場として設立したもので、市島はその重役の地位にあった。これ以上は不明だが、仮に五峰―市島謙吉―日清印刷―『小秋遺稿』をつなぐ糸があるとして、それがもう少し太く見えるようになってきたら、小菅について知るための何らかの手がかりも、これに付随して得られるかもしれない。

すでに遷化していたので、「三たびの訪問の間に、あなたは老・病・死の三相を現じられた。ひとたび指をはじくまに、過去・現在・未来の三世は過ぎる。」と詠んだのである[21]（もちろん、「老」は小秋には当てはまらないが）。結句の「倚竹心」はあまり見かけぬ言葉だが、竹がどのような徳性になぞらえられるかという方向で探ってみれば、含意が見えてくるのではないだろうか。蘇軾に言及したついでに、その「墨竹賦」の一節を挙げてみよう。

性剛潔而疏直、姿嬋娟以閑媚。渉寒暑之徂変、傲冰雪之凌厲。

これを小秋に当てはめれば、病に屈せず強い気持ちを持って生き抜いたところ、詩歌で表現された嫋やかな心映えなど、確かに竹になぞらえられるものがあったと言えるだろう。

作者は南姓であることから、小秋の母方の血筋の人であろうと思われるが、それ以上のことは不明。なお、日露戦争後の四十一年に出版された『軍人名誉肖像録』[22]に、住所が新潟市学校町で、「陸軍歩兵特務曹長　勲七等」として南七蔵という人物が載っている。

四、歌川秋南の「小秋遺稿序」と阪口五峰の「玉梅小稿引」

(1)歌川秋南の「小秋遺稿序」

歌川秋南（一八六二～一九二七）は柄目木村生まれの教育者にして政治家。漢文で記された「小秋遺稿序」の内容のうち、これまでに見た南秋山の後叙等と重複しない事柄だけ取り上げ、その内容を分かりやすい言葉に直して、記しておくことにしたいが、ほぼ次の三点に集約できるだろう。

一、最近、都では閨秀が輩出し、文筆を執った女性が「新を競い奇を衒い」、その「艶冶浮靡」が往々にして風俗を乱し壊すものとなっているが、小秋の作品は全然そのような風潮とは関係しないものである。

「やは肌のあつき血汐にふれも見で…」で有名な与謝野晶子の『みだれ髪』（三十四年）等に代表されるような、中央の歌壇における新しい歌風の出現を意識しての論評であろう。

二、小秋は不治の病であることを知ってからも、吟詠して懐いを遣り、憂悶の色を見せなかった。死ぬか生きるかということに関しては、髭を生やした男子でさえなかなか自分を冷静に取り持つことはできないのに、小秋は心を乱さず、従容としてその思いを述べ、その詩歌が時流を超越していたのは、内面の修養が然らしめたものだったのではないか。

三、父の秋山氏が平素から詩を善くし、伯父の五峰氏に至っては、北越詩壇の盟主である。小秋は天稟の才に加えて、日々の生活の中でも自然と庭訓を授けられたのである。

(2)阪口五峰の「玉梅小稿引」

やはり、これまでに出てこなかった新しい内容だけ、分かりやすい言葉に直して記しておくことにしたい。

北越詩史中の閨秀詩人という視点が、五峰のこの序文の特色で、次

---

21 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第三冊（筑摩書房、一九八六年）三三一～三三三頁。

22 内田安蔵『軍人名誉肖像録』（東江堂、四十一年）六頁。

のような言葉で始まる。―私は最近『北越詩話』を執筆中だが、閨秀詩人は五指を屈するにも足りず、しかもその中でも、吾孫子素琴[23]や野村秋草[24]などは零落して不遇な人生だった。共白髪の一生を送ることができたのは、小田島翠塢の妻[25]ぐらいである。

五峰はこの後、小秋の幼い時からの才能、父親秋山による詩作の手ほどき、小秋の早逝、遺作の刻成等を手短に述べた後、次のような話へと進んでいく。―胡元瑞、その名で言えば、胡応麟（元瑞は字。一五五一～一六〇二）の『詩藪』に古今の能文の女性十数名が挙げられているが、彼女らもまた落ちぶれて不遇で、若い身空で夭折したり、晩年に沈淪したり、夫と離れ離れになったり云々といった具合である。元瑞は、〈造物者は才能のある人をどうしてこうも忌み嫌うのか〉と嘆いているが、私（もちろん五峰）もその点、東西・古今全くおんなじだと悲しくなる。小秋だけに限ったことではない。

[23] 吾孫子素琴は『北越詩話』巻五に「安孫子古登」という名で立項されている（六一六～六一八頁）。水原の人。新潟を訪れた江戸の亀田鵬斎に「其号を命」ぜられたという。鵬斎の来越は文化六年（一八〇九）のことである。これをもってその生きた時代を知るよすがとはなるだろう。その一生については省略する。

[24] 野村秋草については『北越詩話』巻十の野村安之、号鶯渓の項に紹介されている。鶯渓は五峰の姑夫（父の姉妹の夫）で北蒲原郡中浦村吉浦（現新発田市）の人である野村養拙の息子。養拙の長女にして鶯渓の妹になるのが、萩（号秋草。一八五九～一八八七）。その一生については省略。

[25] 小田島翠塢（一七八三～一八五三）は『北越詩話』巻五で素琴の後に立項され、素琴の弟。その妻幸子のこともそこに記されている。幸子は「詩歌に工」だったが、「甚だ永年ならず、竟に翠塢に先だちて亡す」とあるのは、「玉梅小稿引」での「偕老」（夫婦共白髪）というのとは若干の齟齬と言わねばならないかもしれない。

五峰の筆先の赴くところ、小秋のことがしだいに早死にした才人の一般論の中に埋没させられてしまいそうな雲行きにも見えるが、そうはならず、次のように展開されている。―人の寿命はいかほどもなく、たとえ七十、八十まで生きたとしても、大した実績も残さずに終わる人がほとんどだ。そのような中で、片言隻句といえども後世に伝えられるものがあれば、若死にしたとしても、永く続くものを残したことになるのだ。秋山よ、そのように考えて、自らを慰めてくれ。私もそのような考えから、小秋の詩を『北越詩話』の中に取り入れたが、遺稿ができあがるに当たり、またあらためて、以上のような言葉を記した。

この序文の執筆時は、四十三年八月と記されている。五峰が『北越詩話』の編輯に取り掛かったのは大正元年の夏からだったと言われている[26]が、断片的な文章は前々からかなり書き溜めていたのだろう。

おわりに

以上、『小秋遺稿』の全体について紹介してきたが、あと一点付け足しておこう。それは、この小冊子の扉の表に「小秋遺稿」の題字があり、その左に「石埭老人周題眉」の署名及び落款印があり、裏には同じ人物のものと見られる筆跡で「明治康戌八月排印」と記されていることである。この人物、言うまでもなく永坂周、号石埭（一八四五

[26] 『北越詩話』下巻所収の春城市島謙吉「本書の為めに跋に代へて」五頁に「詩話の事業を大別すれば捜索の時代と編輯の時代とに別けねばならぬ。愈々編輯にかゝつたのは大正元年の夏からで其前はまだ捜索の時代であつた」とある。

〜一九二四）で、森槐南の父、春濤（しゅんとう）門下の四天王の一人で、阪口五峰ともかかわりのあった漢詩人である。

本稿を閉じるに当たって再度触れておく必要があるのは、山田穀城と伊藤香草とによる小秋の遺草への「刪潤」の件である。『小秋遺稿』は、小秋の一周忌に、これを霊前に供え、関係者に配付するに当たり、その存在を極力輝かしいものにしようとの父秋山の意図がはっきりと見て取れる書物である。その意図は、たった今言及した永坂石埭、前述の井上通泰、森槐南等、中央の詩歌壇の名だたる人物の題字・識語を随所に配してあるところに、顕著に表れているが、題字や識語を依頼されたこれらの人たちも、原稿のレベルが一定水準以上のものでなければ、己（おの）が名誉のため、気安く引き受けはしなかっただろう。そのために小秋の遺作への添削・潤色が行われたのであるが、その結果、筆者の専門外の和歌はともかくとして、漢詩の方はいずれもかなりハイレベルの作品となっている。添削・潤色がどの程度のものであったかは、もはや探るすべがないが、全十首を通じてそこから読み取れる作者の人格には齟齬（そご）が感じられない。したがって、少なくとも各首のコアの部分は小秋自身によって、しっかりとした表現がなされていたであろうと推察されるのである。

いずれにせよ、本稿で取り上げた『小秋遺稿』をめぐる事柄も、当時の北越の漢詩文界の層の厚さ、レベルの高さをよく物語る一例だと言っていいだろう。

なお、何度も繰り返すが、筆者は和文学については全くの門外漢なので、和歌の部分については専門の方によるご研究を切望する次第である。

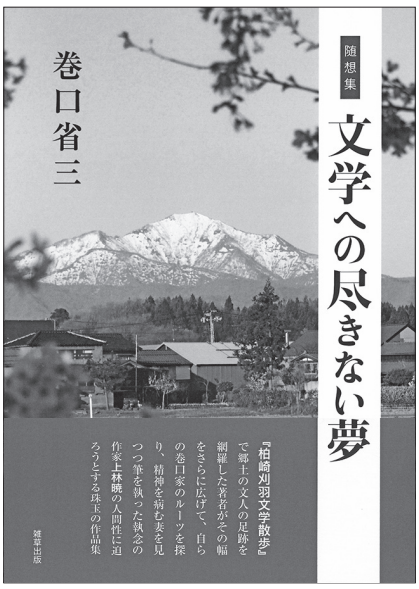
〈筆者・神戸女子大学非常勤講師・
武庫川女子大学言語文化研究所研究員〉

〈囲み記事〉

巻口省三著『随筆集　文学への尽きない夢』雑草出版　令和二年九月刊

一　同人誌「オアシス」から
二　柏崎刈羽文学散歩〈拾遺〉
三　折にふれて
四　上林暁をめぐって

右記の全四章から構成される。平成十二年五月『柏崎刈羽文学散歩』を出版して以来、地元新聞『越後タイムス』『柏新時報』、柏崎高校三回卒生同人誌『オアシス』等へ寄稿したものを収める。とくに第四章で取り上げる上林暁の魅力は、本県では余り知られていないであろう。

著者は長らく新潟県教員を務めた。私は吉野秀雄研究、平成二十七年十一月一日序幕の萩原朔太郎詩碑建立においてとくに学恩を賜った。米寿をお迎えしての著書。

（岡村　記）